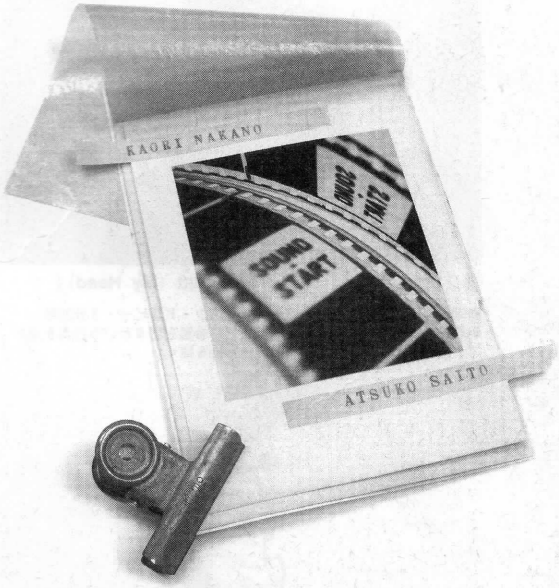
服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織

「ミリオンズ」
シネマライズ渋谷にて上映中



オブジェ制作＝井上陽子

FROM United Kingdom

中野香織 ⑭

モダン・ブリットと007

昨夜ロンドンから帰りました。u誌のモダン・ブリティッシュ特集に向けたほぼ1週間の取材旅行だったんですが、なんだか連日、浮き世離れしたとんがった時を過ごし、まだ夢の中をさまよっている気分です。

詳しくはスポンサーのu誌上に書くことになりますが、モダン・ブリティッシュの象徴として脚光を浴びている店やブランドや人って、「行き過ぎ」てるのです。いちおうこのことばの一般的な定義としては、「過去の新解釈」「伝統と新しさの折衷」ってことになっているんですが（古いのと新しいのミックスは昔からイギリス人の十八番ね）、取材先の多くは、イギリス人らしからぬ過剰なサービス精神とムリな突っ走り感にあふれていて、「あのー、伝統はどこに？」と思わずツッコミたくなっちゃうくらい。

超おしゃれなモダン・ブリティッシュ（という料理のカテゴリーまで生まれているのです）のレストランではとくに。手をかけずに素材の良さを生かすのが伝統のイギリス料理だろうに、デザートの洋ナシ一つをスライスして揚げて砂糖まぶすわ、煮るわ焼くわ極甘アイスのせるわ、もう、たいへん。ただ皮むいて切っただけの洋ナシ、食べさせてくれ。

なんでこんなにやりすぎるんだろう？と思ってたら、本誌11月上旬号のダニー・ボイル監督のインタビュー記事に遭遇。

「サヨナラすることがいかに大事なことか。……（中略）……イギリスもポンドにサヨナラし、ユーロになることで、我々は現代に生きることができるんだ」

そうか。「ミリオンズ」じたいはおとなしめの映画でしたが、映画作家としてのボイル自身はとんがったほうに分類される人。「現代に生きよう」とするクリエイティブな人たちがこぞって「過去にサヨナラを」とアピールしているのが、モダン・ブリティッシュ・ブームなのかな、と。過去の遺産が大きすぎるのでついやり過ぎてしまうのね。ポンド紙幣が燃える映画のシーンは、古い建物がどんどん壊されていく現実のロンドンに重なって見えました。

そんな「過去なぎたおし」のブームは目立つものの、やっぱりそれはごく一部の現象にすぎないのですね。滞在中に、メディアがあるニュースに大はしゃぎする光景を見て少しほっとしました。「名前はクレイグ、ダニエル・クレイグ、007」。あんなアナクロでマッチョなジェームズ・ボンド映画の新主役決定のニュースを、各紙堂々一面扱いですよ。やっぱりイギリスは絶対ポンド紙幣を手放さないだろうな。